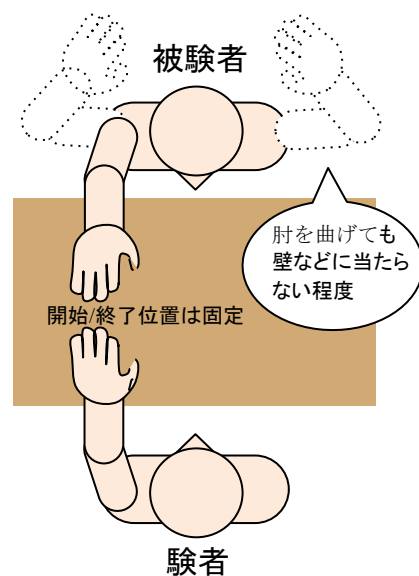


1. 検査要項

- ▶ 左右手に対し実施する際の**所要時間はおよそ10～15分程度**です。
- ▶ 麻痺がない場合には左右手共に評価を行ってください。その場合、**利き手側→非利き手側の順**で行います。
- ▶ 検査は、集中しやすい静かな環境で行ってください。
- ▶ 机の高さは高すぎないように注意してください。(座位にて肘関節屈曲90度程度)
- ▶ 姿勢は椅子座位姿勢が望ましいですが、車いすまたは背上げ姿勢でも可能です。
その際、行為の阻害因子とならないようクッション等でサポートし姿勢を整える等考慮してください。
- ▶ 事前に、教育歴、利き手、失語の確認をしてください。
- ▶ 認知症/失語が重度の場合は、指示理解に影響を受けるため注意が必要です。

2. 実施要項

- ▶ 検査は必ず、**口頭指示10項目→模倣10項目の順**で行ってください。
- ▶ 重度失語などで口頭指示を行えない際は模倣のみ実施してかまいません。
- ▶ **動作の観察時間は最長15秒まで**です。
- ▶ 1回目で動作を完遂できない場合、**2回まで動作を実施できます**。
2回目で完遂できなかった場合は、次の項目へ進んで下さい。
- ▶ 検査は必ず開始/終了肢位から始め、同じ肢位に戻して終了します。
- ▶ 開始/終了肢位は、手掌面を下にし机の上に置いて下さい。
- ▶ 動作(行為)は、腕(肩、肘、手、指)の各関節を正しく動かしているか確認してください。
- ▶ 模倣は肩の高さや肘の曲がる角度なども採点対象になります。
- ▶ 対象者が指示を聞こうとしているか、模倣時に確認作業を行っているか等注意を向けられているか観察してください。
- ▶ ジェスチャー能力以外でも気になる点(その他の高次脳機能障害など)は小括などに記載してください。



3. 採点

- ▶ 採点は、10-5-0の3段階
- ▶ 10点: 誤反応なく1回目で完遂出来た場合
5点: 2回目で完遂出来た場合、又は誤反応が出たが自己修正し完遂出来た場合
0点: 2回実施しても完遂出来ない場合
- ▶ 正常の場合と比較して、問題がないか採点してください。
- ▶ 得点が高い程ジェスチャーの能力が高いことを表します。
- ▶ 口頭指示100点、模倣100点、合計得点200点、カットオフ値は145/150点です(145以下は障害あり)。

4. 口頭指示

・口頭指示: 繰り返し説明は可能

「こちらの手(実施手)で行います。」と実施手を開始肢位に誘導する。

「ここ(開始肢位)に手を置いてからはじめます。」

「私がこれから言う通りに動作を行ってみてください。」

1回目で完遂出来ない場合、

「もう一度行います。私が言うことをよく聞いて、動作を行ってください」

・注意点

③物品使用動作にて、BPOが見られた場合、動作を完遂出来れば5点になります。(模倣の場合は、0点です)

左右手を行う場合は、①-3「親指と人差し指で右耳をつまむ」は、「左耳」にかえて行う(模倣も同様)

5. 模倣

口頭指示

「私はあなたの鏡のように動作を行います。私が左で動作をした後に、あなたは右でまねしてください。」

「まねする動作は、私が手を動かし始めてから元に戻すところまでです。」

(動作をしてみせながら)必ずここ(開始/終了位置)から始まり、ここに戻してください。」

「では、同じように行ってみてください。」

(動作を開始し、模倣動作の観察後に終了位置に戻す)

・注意点

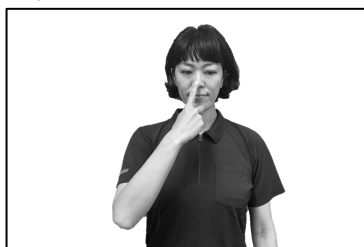
模倣時、験者は被験者の正面に座り、鏡様に行為を提示してください。

(被験者の右手を検査する際、験者は左手にて行為を提示する)

失語が重度の場合は、長文で口頭指示をださず「まね」することがわかるよう、単語などで指示しても構いません。

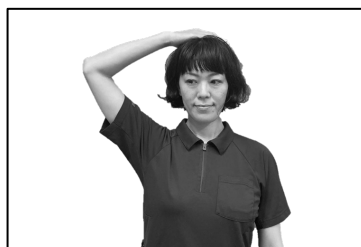
6. 模倣掲示の見本(写真は左手用の掲示)

1. 鼻の頭に人差し指を置く



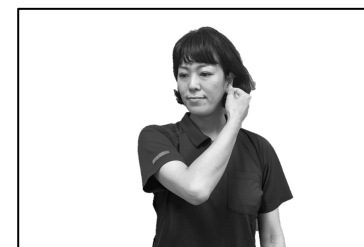
- ・肩は軽度外転、前腕回内位
- ・手指: 示指以外は閉じる

2. 頭の上に手のひらをのせる



- ・肩は外転/外旋位
- ・手指は閉じる

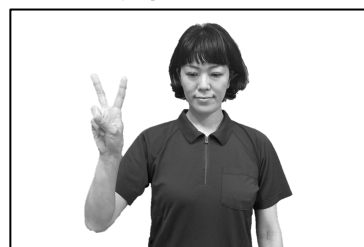
3. 親指と人差し指で耳をつまむ(交差)



- ・肩は内転/外旋位
- ・手指は母指を手前にしてつまむ

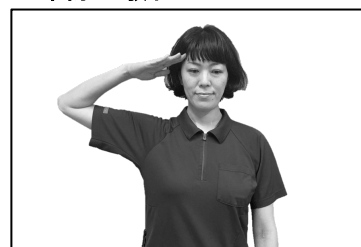
見本

4.ピースサイン



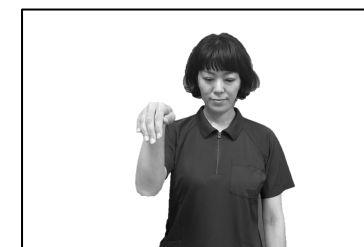
- ・肩は軽度屈曲/外転、前腕回外位
- ・手指は2指以外は閉じる

5. 軍隊の敬礼



- ・肩は外転/外旋位(肘は肩の高さ)
- ・前腕は中間位、手指は閉じ伸展
- ・こめかみに示指(中指)の先をつける

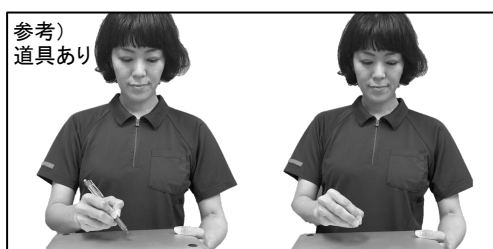
6. おいでおいで



- ・肩は軽度屈曲/内転、外旋位
- ・前腕は回外位
- ・手関節から柔らかく掌背屈する

見本

7. 鉛筆を持ったつもりで字を書く

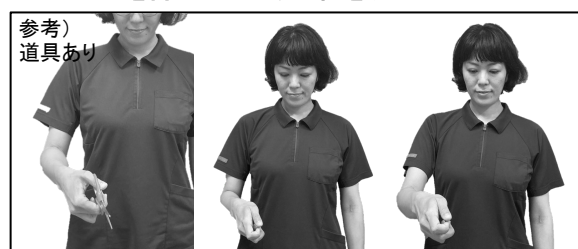


参考)
道具あり

- ・手と手指は机より浮かし手首を動かし空書する

見本

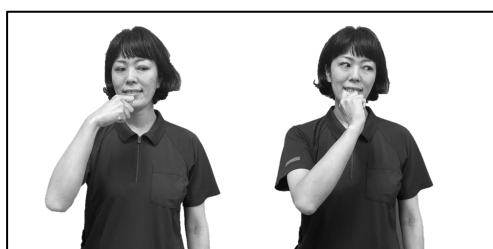
8. はさみを持ったつもりで紙を切る



参考)
道具あり

- ・母指と示指(中指)で持ち、指を動かしながら肘を伸展する

9. 歯ブラシを持ったつもりで歯を磨く



- ・口と適度な距離を保ち、首を動かし左右を磨く

10. コップを持ったつもりで水を飲む



参考)
道具あり

- ・母指と4指で持ち、顔と手を傾けて飲む。手は口につけない

7. 誤反応について

➤ 採点の横には、よく見られる誤反応を5つ選定し、記載しています。

1. BPO (Body parts as objects) : 自身の身体を道具の一部として使用する
2. 関節の誤り: 使用する関節や関節の動かす方向/向きを間違える
3. 拙劣さ: 動作がたどたどしく、不器用な感じだが、適切な行為を行う
4. 修正行為: 誤りに自身で気づき、修正する、目的の行為に対し試行錯誤が認められる
5. 保続: それ以前に行った動作(行為)の全て、または一部を繰り返す

➤ 5つに次いで見られやすい誤反応を、「その他の誤り」として、用紙下面に挙げています。

8. よく見られる誤反応例: 誤反応例を記載しているので、参照下さい。(左上は項目を示す)

● 関節の誤りはよく見られる。模倣は特に見本をよく見て再現する必要がある

関節の誤り(静的肢位:最終肢位) すべての上肢の関節が正しい肢位か確認すること



無1
・肩外転0点



無2
・肩内転0点



無3
・上肢交差なし0点



有2
・肩屈曲不足5点



有1
・肘伸展0点



有1
・前腕回外0点



有1
・手指形状違い0点



有2
・肩手首不十分0点

関節の誤り(動的肢位:動作)



有3



有3

動かす関節が異なる、反復困難:0点

錯行為(動作の取り違い)



有3

おいおいおい→手をひらひら:0点

拙劣さ



有1

たどたどしいが完遂できる:5点

身体部位の誤り



無1

身体部位の誤り:0点
鼻の頭→あご

位置関係の誤り



物1

距離が近い:5点

位置関係の誤り



物4

距離が近い:5点

位置関係の誤り



無1

部位が異なる:0点
頭の上→鼻

BPO



物3

指で歯を磨く
口頭:5点、模倣:0点

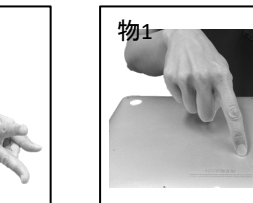
BPO



物2

はさみで紙を切る
口頭:5点、模倣:0点

BPO



物1

鉛筆で字を書く
口頭:5点、模倣:0点

持ち方誤り



物4

コップで水を飲む
正しい動作なら口頭:10点
模倣:0点

誤反応について(補足資料)

- 誤反応については、参考資料となります。細かな誤反応を見たい場合は、以下を参照ください。
- 見られやすい誤りとして以下にも気をつけましょう。

動作の取り違い:異なる動作を行う、例:おいでおいでをバイバイなど(有関連の誤り)

使用手の誤り:左手ではなく右手を使おうとするなど(失語の影響か、失認か、抑制系か確認が必要)

左右の誤り:右耳を指示しても左耳を触るなど((失行以外にも失語の影響か、失認か確認が必要)

身体部位の誤り:頭の上→鼻の上に手を動かす、人差し指を中指で行うなど(失認か確認が必要)

関節の位置の誤り:鼻の頭に人差し指→人差し指が鼻頭にずれる、敬礼がこめかみ→あごにずれるなど

1.動作の不完全さについて

- **拙劣:**動作がぎこちなく不器用な感じだが、適切な行為を行う
- **開始の遅延:**動作を始めるまでにためらいが見られ遅れるが、開始すると適切な行為を行う
- **過剰緊張:**全体的または身体の一部に異様に力が入ってしまうが適切な行為を行う
- **関節への注意力低下:**動かしている関節の一部にしか注意を払えないが適切な行為を行う

➢ 動作の不完全さだけでは行為を完遂出来ない理由にはなりませんスムーズな遂行が難しい場合があります。

2-1.行為の誤りについて

➢ 動作の不完全さと重複して認める場合もありますが、2つ以上の行為の誤りを認める場合もあるので注意してください！

➢ 行為の誤りは、誤り方によって大きく3つに分類されます。まずは誤りがどの分類に当たるかを見てください。

- | | |
|--|-------------|
| (1) 目的運動自体を行えない | ⇒内容的誤り |
| (2) 目的運動自体は正確に行えるが、運動のスピードや回数を誤る | ⇒時間的誤り |
| (3) 目的運動を行おうとするが、誤った動作になってしまう | ⇒空間的誤り |
| (4) 目的運動を行おうとするが、誤った動作になり、かつ運動の回数なども誤る | ⇒時間・空間混合型誤り |

➢ ジェスチャー能力が低下した患者に多く見られるのが空間的誤りといわれています。

➢ 誤りの特徴を知りアプローチに役立てることが出来ます。必要に応じてより細かい分析を行っていきましょう。

2-2.行為の誤りの細分化について(Rothiらの報告に基づいて記載)

(1)内容的誤り

- 保続:それ以前に行った行為の全部または一部を再生する
- 有関連:物品使用動作の際、標的の行為と内容的に関連がある別の行為を正しく行う
- 無関連:物品使用動作の際、標的の行為と内容的に関連がない別の行為を正しく行う
- 無定型反応:何をしているかわからない反応、部分的行為も含む
- 無反応:何も反応しない
- 修正行為:目的の行為に対し試行錯誤が認められる

(2)時間的誤り

- 順序性:付加、削減、運動要素の転位がある
- タイミング:典型的なタイミングまたはスピードの乱れをきたす。速度の異常な亢進、減退、不規則を含む
- 算出回数:1回で済むことを複数回行う、複数回要することを1回で済ませる

(3)空間的誤り

- 運動振幅:振幅の増大、減少または不規則
- 動き:目的動作に対する固有の動きを誤る(誤った関節を動かしてしまう、又は正しい関節を動かせない)
- 内的位置関係:指や手が想定した道具の形や機能を反映した一定の空間的關係がとれない
体と物との関係で生じる(例:櫛の pantomime の際、手に櫛を持っている分の空間をあけておける等)
- 外的位置関係:物品や身体との関係を正しくとる、および空間内に物品ないし身体を正しく置くことの困難さ
(例:敬礼にて指先が目のふちよりずれる、ピースの向きが回旋する等)
- 身体部分の客体化:指、手または腕を想定している道具として用いる